

< 社会学的映像モノグラフ >

つむぎ合う、未来。—ポストフクシマの新しい生き方と社会像—

上映会のご案内

2014年5月6日(火・祭)午後2時40分より上映(開場2時)

日本大学文理学部「オーバルホール」(図書館3階)にて

入場無料(どなたでも参加できます/予約不要/先着200名)

主催:日本大学文理学部社会学科 後藤範章研究室

京王線・世田谷線「下高井戸駅」又は
京王線「桜上水駅」下車 徒歩8分

日大生がドキュメンタリー制作

後藤教授(右から3人目)を交え映像をチェックしながら改善点を出し合う学生たち=2月、世田谷区の日大文理学部で



原発事故後の 生き方探るの

日本大学文理学部社会学科(世田谷区)の学生たちが、福島第一原発事故後に被ばくから子どもを守るために行動する人々を追ったドキュメンタリーを制作した。2011年11月から昨年9月にかけて東京、岡山、沖縄で取材。就職活動や卒論の合間を縫って編集作業を重ねて62分の映像にまとめた。(小形佳奈)

子どもを守るため行動する人々を追う

ドキュメンタリーで石垣島に移住した女性が語る場面



タイトルは「つむぎ合う、未来。—ポストフクシマの新しい生き方と社会像」。後藤範章教授(都市社会学)のゼミに所属する四年生六人が中心となって取材や撮影、編集などにあたった。学生たちは、福島県から避難した人々を支援する映像に出演。母親仲間と

世田谷区内で小学一年から高校二年の三児を育てる瀬田美樹さん(西きも)が、ドキュメンタリーに出演。母親仲間とあつためて考えてほしい」と願う。後藤ゼミのホームページは <http://n510.com> でダイジェスト版を公開している。四月からは完全版のDVDを無料貸し出す。

岡山県の女性や、子どもの健康を考えて神奈川県から沖縄県の石垣島に移住して民宿を営む女性らに話を聞いた。取材を通じ、子どもを守りたい一心で活動を始めた女性たちが、同じ思いを抱く人々と連携を深めているという共通点に気づいたという。制作スタッフの山本愛香さん(三)は「母親として命を守りたいとつながった人々が思いを共有し、新たな活力が生まれ、今回の場合だけでなくどんなことにも通じる」と話す。

沖縄・岡山・東京で取材・撮影を重ね、「語り(ナラティブ)」によって、原発事故とポストフクシマのありようを捉え返し、「未来」を照射する「社会学的映像モノグラフ」。61分58秒。

復興庁が発表している「全国の避難者等の数」によれば、2014年2月時点で約26万7千人の人々が避難生活を送っている。自分の県以外に避難等をしている人が最も多いのは、福島県で47,995人を数える。また、近畿地方より西側のエリアで受入数が最も多いのは、岡山県の1,046人、2番目が沖縄県の973人、次いで大阪府の955人となっている。

私たちは、原発事故に伴って全国各地に避難している方々や支援団体を対象とする社会調査を進めていく中で、何人かのキーパーソンと出会った。彼女らへの取材を通じて、日本社会が一大転換期のただ中に置かれていることを再認識し、転換後の社会像と生き方のモデルがどのようなものであり、未来がどのように紡ぎ出されていくのかを追究した。

人間らしく生きるには、どのような生き方をしたら良いのだろうか。子どもの生命と安全を守り、健やかに育っていく環境とは、いったいどのような環境なのだろう。誰もが皆「人生の主人公」として穏やかにそして幸せに生きることができる社会とは、いったいどのような社会なのだろう。

福島第一原子力発電所の事故は、そうした根源的な「問い」を私たちに突きつけている。この意味で、私たちは、これまでの生き方や社会のありようを問い直し、変えていく「一大転換点」に立たされている、と言って良いだろう。

未来は、この地平から紡ぎ出されていくのである。

詳細については、<http://n510.com> をご覧ください。

文部科学省科学研究費補助金による2012・13年度の挑戦的萌芽研究「原発事故に伴う広域避難と支援の社会学—『転換後』の社会像と生き方モデルの探究」(研究代表者:後藤範章日本大学教授)の成果の一部